經濟論叢

第122巻　第1·2号

哀　　辭

故小島昌太郎名誉教授遺影および略歴

The Oriental Bank Corporation, 1851–84 年（下）
……本山美彦　1

ドイツ第二帝制における1879年の政策転換に
関する一研究……野田敬一　23

労働者の生活時間構造と余暇……福島利夫　45

資本主義社会における老人の生存権について…小川和憲　68

ゴエルロ計画の方法と発表後の経過……中江幸雄　86

追　憶　文

小島昌太郎先生を憶う……堀江保蔵　111

小島昌太郎先生を偲ぶ……中谷實　114

昭和53年7・8月

京都大學經濟學會

追 憶 文

小島昌太郎先生を憶う

堀 江 保 蔵

去る6月11日，名誉教授小島昌太郎先生は90歳の高齢をもって逝去された。老衰のためとのことであるが，本当に眠るが如き大往生であったにちがいない。

いまからちょうど3年前，昭和50年7月20日に，京都タワー・ホテルで，経済学部同窓会総会を開き，先生をお招きしたところ，快諾せられ，懇談会の席で御挨拶を頂戴した。しゃんとした立ち姿といい，朗々たるお声といい，とても87歳とは思えぬお元気さであった。そのころは，ロータリー・クラブの例会にも，タクシーのお世話にならずに出席されていたと聞いている。その後，私自身，毎年のように大病を患ったせいもあって，一度もようお訪ねしないままでいたところ，6月11日に突然の訃報に接したしだいである。

私にとってもっとも懐しく思い出されるのは，今は無い木造教室の教壇に立たれた先生のお姿であり，お声である。大正14年（1925）に京大経済学部に入学した私は，たしか，2年生で「保険論」，3年生で「交通論」の講義を拝聴した。保険論の講義の中で，いつまでも頭に残っているのは，リスクとその発生の大数法則性，そのリスクに備えての保険料をもってする共通準備財産の形成など，要するに，保険を構成する諸要素に着目した概念構成方法である。保険を，保険者と被保険者との契約関係として理解してきた在来の法律学的解釈を鋭く批判し，経済的な集団の仕組みとして理解すべきことを強調される先生の熱気には，全く心を打たれたものである。その前年に公けにされた『保険本質論』を教科書として使わせていただいたが，日本における保険学の草分けとして，十分な自信をもって本書を出版されたその翌年に，一学生として先生の講筵に列しえたことは，まことに幸せであった。

3年生のときに拝聴した交通論の講義は，そのノートが手許に残っているので，そのページを繰ることによって，当時の先生を眼のあたりに浮べることができる。その内容は，第1章序論，第2章交通機関の発達，第3章交通機関および交通発達の効果，第4章交通事業の経営，第5章交通事業における競争，第6章交通事業における独占に分説されている。

そのなかで，先生が最も慎重な口調で講義を進められたのは，交通および交通政策の概念を論じた第1章で，これは交通論を経済学的に体系づける上に，非常に重要な章で

あった。私のノート・ブックには，最初の第1ページに，先生が示された5種類の参考文献が書かれているが，それらの著者は Borght（交通論），Wagner, Schmoller（以上国民経済論），Grunzel, Sax（以上交通政策論）で，そのうち R. van der Borght; Das Verkehrswesen. を先生は一番注目されたらしく，その Der Begriff Verkehr と題する文章の2ページが，ノート・ブックの次のページに貼られている。これは，先生がその分をわざわざ活字印刷にして我々聴講者に配布され，同時に解説されたものである。今日のように便利な複写機のなかった当時に，このようなものを頂戴してと，いまさら感謝に堪えない。

そういえば，第5章の交通事業における競争のところで出てくる海運会社の運賃延戻し政策については，イギリスの P. O. 会社の契約書（英文）の写しももらっているし，保険論の講義では「ロイド保険組合及びロイド船級組合」と題するリーフットや，海上保険証券（marine policy）の写しを頂戴した。教えるということにおいて，先生は本当に熱心だったのである。

さて，交通および交通政策の概念を確定した上で，第2章，第3章は簡単な要領筆記に止め，第4，5，6章と強い調子の講義が続いたが，この辺はいわば先生の御得意のところであって，たとえば学年末試験の問題には，交通事業の経営に関連した現実問題が出題されたし，交通事業における競争のところで挙げられた「反対方向へ走る私鉄間の激しい競争」の話が，いまなお耳底に残っている。交通事業における独占にいたっては，『海運同盟論』（大15）なる大著が出た翌年であるだけに，海運同盟に関する先生のお話には実に内容豊かなものがあった。あとにしてうかがえば，海運同盟（conference）が海運業界のカルテルに外ならないことを論証したのは，先生をもって嚆矢とするということであったが，全体として，交通論を経済学の一分科として独立させ，体系立てた功績は全く小島先生に帰せられるのであって，ことに『海運同盟論』が学位論文になったのは当然すぎるほど当然であった。

先生の御研究分野は，保険論，交通論を越えて，さらに拡がった。「経営学」と「金融論」がそれである。経営学は，恐らく，交通論における政策面，すなわち交通事業の経営や競争・独占などとの関連において，先生が踏み入れられた学問分野であって，この分野においても先生はわが国における先駆者的地位を占めておられる。そして，昭和5年からその講義をなさったばかりでなく，翌年には門下生を率いて『経営と経済』なる月刊学術雑誌を創刊された。当時では珍しい横組みの雑誌であった。金融論は，昭和13年に汐見三郎教授が財政学講義へ移られたあとをついで，小島先生が担当された講義科目であるが，先生の金融論への造詣はもっと早くに始まった。すなわち，満州事変

(昭6)後の赤字公債の発行とインフレーションの問題に関連していわゆるマニー・フローの問題に深い関心を示されたのである。その点について思い出されるのは，保険論の講義であって，先生は，長期的に見て保険会社が儲ける一源泉は貨幣のインフレ傾向にあり，すなわち，受取った保険料よりも支払う保険金の価値が下るからだという意味のことを話された。

私が講師（当時は年度講師）として始めて経済学部の教壇に立ったのは，昭和5年4月であるが，そのとき先生は学部長をして居られた。学部長室における講師任用の伝達に際して，「講師になることは必ずしも助教授になる前提ではない」旨を，さとすように話された。

先生のお人柄は，一言でいえば，謹厳実直，酒・煙草をたしなまず，むしろかんしようと他人から云われるほど潔癖でもあった。大阪の大きな紙問屋の御曹子であるということを伝え聞いていたが，いわゆる大阪商人らしいところは少しもなく，むしろ貴公子といったタイプのお方であった。美しい口髭をたくわえた童顔の紳士で，洋服の着こなしもりゅうとしていた。言葉づかいも丁寧で，私たちに対しても，いつもにこやかに，「ですか」調で話された。

先生の考え方には，政治的なところも，イデオロギー的なところもなかった。先生が教授として経済学部に在勤された時代には，石川興二，谷口吉彦，作田荘一，蜷川虎三らの錚々たる論客が居られて，概ね夕食後に楽友会館の講演室を利用して開かれた経済学会の研究例会では，議論沸騰して止まるところを知らないことも稀ではなかったが，小島先生は，本庄・汐見の両先生らとともに，むしろ寡黙の方であった。

先生の御研究分野が広汎にわたり，また上述のようなお人柄の故もあって，門下に育った研究者は大変多かった。私の記憶するところだけを掲げても，つぎのようである（括弧内は主たる勤務校と専攻）。近藤文二（大阪市大，保険論・社会保障制度論），磯部喜一（東京工大，経営学），佐波宣平（京大，保険・交通論），山本安次郎（滋賀大・京大・名古屋市大，経営学），西藤雅夫（滋賀大，保険論・交通論），石田興平（滋賀大・阪大・京産大，金融論），熊本吉郎（立命大・京都学園大，金融論），小泉貞三（関学大，交通論），吉川貫二（同志社大・京都学園大，交通論），丸岡淳夫（金沢大，経営学）。そのうち，磯部・山本・石田の三教授を残して，他の諸教授は小島先生に先立って他界されている。その点で，先生の晩年はお淋しかっただろうと推察される。

しかし，先生のお弟子の裾野は広かった。たしか京友会といったと思うが，先生の演習出身者を網羅する会が作られ，朝日新聞社主上野淳一氏，鈴与株式会社々長鈴木与平氏，国際文化会館専務理事豊田治助氏らが中心となって運営せられ，会報も発行されて

いた。

昭和21年2月に京大経済学部の総退陣ということがあった。敗戦にかんがみ，学部の体質を作りかえようとするもので，教授・助教授・講師全員，新学部長を選んで辞表を提出し，新学部長にその処置を一任することになった。当時経済学部内にぎこちない空気が流れていたことは事実であるが，今にして思えば総退陣というようなドラスティックな方法をとるのが賢明であったかどうか，疑問が残る。しかし，敗戦に対する国民的責任という背景が大きく広がっていた当時の情勢では，やむをえなかったかも知れない。この総退陣を決議した教官協議会において，汐見先生は一言二言発言されたが，最年長教授であった小島先生は，短かく〝諾〟を表明されただけだったと記憶する。その先生の態度を，きれいであったと，私はいまも追懐するしだいである。

先生は昭和23年秋に神戸商科大学々長に就任せられ，およそ10年間同大学の発展に尽瘁された。その後しばらくして，今度は桃山学院大学の学長に就任せられ，学園紛争の激化とともに，辞して悠々自適の生活を送られることになった。その御様子からみて，もっともっと長生きされることと思い，またそう念じていたのであるが，さすがの先生も老衰には勝てなかった。こうして私は，経済学部の教室で直接に教えを受けた先生が1人もないことになったのである。